

# 文学における焼身自殺

—デリーロと目取真の自死のかわし方—

小池理恵

## 抄 録

本稿では文学に表象される「自殺」を「病」としての西洋的自殺に東洋的な視座を連動し再定位した上で「焼身自殺」の意味を次の二作品を通して検証することを目的とする。「焼身自殺」に言及した作家として、目取真俊とドン・デリーロを並べてみる理由は、彼らの同質性「社会を変えられないシステムと捉える」を確認したあとに理解されるだろう。筆者の意図は目取真の「希望」(1999) (*Hope* 1999・2016) における「焼身自殺」の意味を浮かび上がらせることにあるが、デリーロの *Cosmopolis* (2003) (『コズモポリス』2012) がそれを明らかにしていると考えている。

「文学と自殺」の研究の多くが自殺を図った作家の心理状況の分析や個別作品における自殺の問題を検証したものであるが、本稿は、焼身という自殺の手段に注目し、断片的で部分的でありながらも敢えて「焼身自殺」を受容した二作品を、高橋和巳の「焼身自殺論」を基調とし、その意図と効果を読み解きたい。

キーワード：焼身自殺、日本と自殺、西洋と自殺、沖縄文学

### 1. はじめに

筆者が沖縄に関する文学として目取真俊を読み始めたのは、モーリシャスの地域研究を始めてからだ。Bharati Mukherjee の小説 *Jasmine*<sup>1</sup> を通じて知ったモーリシャスを初めて訪問したのは2000年だったが、そこでチャゴス難民問題に遭遇した。日本とモーリシャス、一見無関係な太平洋の島国とインド洋の島国であるが、チャゴス島民と沖縄県民には米軍基地という共通の問題点があった。

その後チャゴス難民を描いた文学と沖縄を描いた文学を比較できないかと考えるようになった。比較というよりはむしろチャゴス難民たちを抱えているモーリシャスに沖縄文学が提示している基地問題を知ってもらうことが主たる目的である。チャゴス難民を描いた文学は英語圏文学ではそれほど多くはない。更に沖縄文学とは異なり、作家たちは被害者であるチャゴス難民たち自身ではない。このような背景の中でハワイ大学出版が2016年に沖縄文学の翻訳を出版した。*Islands of Protest* に収められている様々な沖縄文学作品の先頭を切って収録されているのが目取真俊(1960-)の「希

<sup>1</sup> The woman from Mauritius, the only other woman on the boat, and mostly Indian, to look at, cried... She was a fervent Catholic with a French accent.... The Mauritian wept delicately into a handkerchief. (pp. 94-95)

望」(Hope)である。ハワイ大学出版による出版に先立ち同じ翻訳者 Rabson による英訳がウェブ上で公開されている。

「希望」は『沖繩／草の声・根の意志』(2001)に収録されている。これは小説集ではない。エッセーを軸に、時評的な文章が中心となっている。小説としては巻末に単行本未収録の6編の掌編小説が付されている。これらのうち、発表当時から物議をかもしたのが「希望」である。政治的発言の後に付され、この作品は、特異な色彩を放っている。この本の発刊日の翌日、アメリカでは同時多発テロが発生し、「テロ」という言葉の意味合いは一変することになる。

「希望」のオリジナルは、1999年6月に朝日新聞に掲載された。この作品が物議をかもしたのは、主人公が米兵の幼児を殺害するという展開による。発表後まもなく共同通信による作者へのインタビューが行われ、その冒頭の質問がこの作品についてのものであった。その後この作品は一般読者の手を離れ、富山一郎の肯定的な発言を受けて賛否ともつけがたい向井孝の論評(『反戦インターネット情報』2000年6号)が出され、『ユリイカ』2002年8月号で徐京植による好意的なコメントがある。

「希望」は展開が衝撃的なだけでなく、表現方法にも様々な試みがなされている。それが芥川賞作家(1997年受賞)目取真の描写力でもある。特に殺害場面は直接感性に響くような衝撃力を放っている。この作品には特殊な視点の構造が指摘できる。まず三人称小説のように始められるのだが、いつのまにか犯人の視点に移行し、結末では再び当事者を客観視する視点へと昇華する。それは死後の魂がその後の沖繩を俯瞰するかのようにも感じられてくる。目取真はこの間肝心なところで主語を用いない。ある意味翻訳者泣かせでもある。Rabsonもハワイ大学出版で出版する際にウェブ版での自信の翻訳に加筆修正している。この境界がはっきりしない二重の視点の上に、エッセーを通読した上でこの作品に至った読者にはある奇妙な感覚が宿る。犯人の主張、「お行儀のいいデモをやってお茶を濁すだけのおとなしい民族」「軍用地料だの補助金だの基地がひり落とす糞の様な金に群がる蛆虫のような沖繩人」という内容は既に前半のエッセーで主張されている。フィクションである「希望」では「最低の方法だけが有効なのだ」、すなわちテロという具体的な形を与えられている。この作品では主観と客観、幻想と現実、作中人物と作家、さらには小説と小説外部の現実とが二重構造的に呼応しあう。だからこそ現実以上に現実的な描写力となる。まさに特異なフィクションであり「仮想ながら衝撃的なエッセー」と呼ばれる所以である。(大野2016)

政治活動家でもある目取真にとってテロは条件次第では容認されるのである。目取真の前には多数の障害が立ちだかっている。それはドン・デリーロの社会の捉え方とも共通する民主主義という現在の意思決定のシステムでもある。そして沖繩は戦後驚異的に豊かな地域になり、社会が成熟したことにより、一定の文化的連帯感は維持するが、政治的な連帯を求めるのは時代遅れとなってしまったかもしれない。沖繩の若者はウチナンチュ以前に「一個人」なのである。その現れが「チビチリガマ荒らし事件」である。

## 2. 日本と自殺、そして西洋と自殺

「日本と自殺」、特に目取真の出身地である「沖縄と自殺」、中でも集団自決について触れておきたい。それは目取真の作品を扱う上で、また日本人と自殺を語る上で重要だと考えるからだ。

チビチリガマという「集団自決」(141名中84名の自決)の場所が4名の少年たちによって荒らされた事件(2017年9月)を受けて *The Island's Will* (Written and Directed by Ryugo Nakamura 2018) という映像がネット上映された。この「集団自決」は自決であったのか、それとも軍による強制であったのかが問題となっていた。

### WHOLESALE JAP SUICIDES GREET YANK LANDING PROPAGANDA BLAMED

Apparently they were driven to their act by fear, planted skillfully by Japanese authorities, that they would be mistreated by invading American forces.

*Washington Post*, 1945/04/02

上記引用に示されたアメリカのワシントンポスト紙の報道によると、軍の強制や米軍に敵対する意識の植え付けによりこの悲劇が起こったことになる。そして戦後40年経ち、ようやく事実を語ることが許された日本では、1984年6月23日付の『朝日新聞』で「投降すれば虐殺だ 生存者39年ぶり証言」と題する記事が掲載され当時起こったことが語られている。

2017年から高校日本史教科書(山川出版)「詳説日本史 改訂版」で沖縄戦「集団自決(強制集団死)」に関する記述が復活した。同教科書は、2007年度以降に記述を削除していたが、沖縄戦体験者らが復活を求めている。この改訂により「(略)島民を巻き込んでの激しい地上戦となり、おびただしい数の犠牲者を出し、6月23日、組織的な戦闘は終了した」が「(略)島民を巻き込んでの激しい地上戦となり、『集団自決』に追い込まれた人びとも含めおびただしい数の犠牲者を出し、6月23日、組織的な戦闘は終了した」と修正された。(『沖縄タイムス、2016年12月1日』)このように戦後日本では、「自らの死=自決」を正当化せざるを得ない空気があった。

今日の日本の現状はどうだろうか。著名な文化人類学者、オスロ大学教授トマス・エリクセン(Thomas H. Eriksen 1962-)は「決して日本社会のようにはなりたくないだろう。日本社会では「自殺」は文化のようだ。毎日多くの日本人たちが自殺に追い込まれている」<sup>2</sup>と述べた。このように日本社会は自殺量産国、負のお手本として

<sup>2</sup> エリクセン教授はオスロ大学で社会人類学の博士号を取得後、同大学で教鞭をとっている。トリニダード、モーリシャス、ノルウェーの地域研究に加えアイデンティティ・ポリティックス、ナショナリズム、エスニシティに関する数多くの著書がある。2017年にモーリシャス大学で開催されたモーリシャス独立50周年記念国際シンポジウムでこれからのモーリシャスの進むべき方向性を問われ、引用のように述べた。その場に居合わせた日本人は筆者のみだった。

言及されることもある。

エリクソン氏の発言は決して誇張ではない。日本人にとって自死は、武道や華道、茶道などと並ぶ「道（精神神髄）」であり、換言するならば、ある種の「核心」をなすものであるともいえる。ここでオランダの哲学者で剣道家（日本で剣道を学び和蘭チャンピオンにもなった）でもあるヘンク・オースターリン（Henk Oosterling 1952-）が「日本の死の倫理と意識 無の肯定」で述べていることを参照したい。彼はまず、「日本では死は核心をなす事象である」ことを確認した上で、「日本には切腹という儀式的な自殺の方法があり、これは西洋の自殺の認識とは全く異なった価値観を表している」と分析している。西洋の基準からすると文化の折衷主義、経済の便宜主義とみなされることの多い日本文化だが、もっと深い根を持っている。

神道と並んで日本の武人階級（武士・侍）の禅仏教が自殺の観念に影響を及ぼしている。日本の国民的シンボルの桜の花は、短い極めて美しい命を象徴、それぞれの命が美しくも強いられた死の中で完成するはかなさを意識している。「名誉の死、死に花を咲かす」などという死を美化した日本語もある。

長い間、個人という観念がなかったことで、日本では個人の決断はいつも集団の輪、調和を考えて試されてきた。日本人の誇りは和と義理のための自己犠牲の上に形成され、この背景では「切腹」は集団の名誉のための儀式的な自殺で義理の究極の形となる。このように捧げられた死は、集団自決のシステムとも連動する。

切腹は1870年に公式に禁止されたが、三島由紀夫（1925-1970）の死により復活する。三島の死の肯定的な意味を理解しようとする時、焼身自殺が大きな役割を果たしていることがわかる。三島は『若きサムライのために』において、焼身自殺を遂げた江藤小三郎に言及している。

二月十一日の建国記念日に、一人の青年がテレビの前でもなく、観客の前でもなく、暗い工事場の陰で焼身自殺した。そこには、実に厳粛なファクトがあり、責任があつた。芸術がどうしても及ばないものは、この焼身自殺のような政治行為であって、またここに至らない政治行為であるならば、芸術はどこまでも自分の自立性と権威を誇っていることができるのである。私は、この焼身自殺をした江藤小三郎青年の「本気」といふものに、夢あるいは芸術としての政治に対する最も強烈な批評を読んだ一人である。（15）

ここでは芸術と政治、自力と他力、個人と社会、精神と肉体、存在と無のような単純な二項対立は無意味である。

一方西洋では、自殺は病理学的衝動によるものであり、超越神に基づく道徳は、自殺に日本のような肯定的な評価を許さない。ノーベル賞受賞作家であるカミュは次のように述べている。「真に重大な哲学上の問題はひとつしかない。自殺ということだ。人生が生きるに値するか否かを判断する、これが哲学の根本問題に答えることなのである」（「シーシュポスの神話」1972、p.82）。そしてカミュは自殺を不条理な運命を

見つめない態度として退け、逆に明晰な意識のもとで不条理を見つめ続ける態度を「反抗」と言い、それが生を価値あるものにするとしている。

カミュといえば「不条理」であり、それは理性では割り切れず、しかも人間の奥底には明晰を求める死に物狂いの願望が激しく鳴り響いていて、この両者が相対峙したままである状態としている。つまり人間の中にあるものでも世界にあるものでもなく両者の共存の中にあるもの、「両者を結ぶ唯一の絆」(98)である。カミュはさらに、「自殺」とは認識の不足であり、「希望」(86)とは一般に信じられていることとは反対であきらめにも等しいものである、としている。

自殺というこの行動は、偉大な作品と同じく、心情の沈黙のなかで準備される。当人自身もそれを知らない。(中略) あるひとりの人間の自殺には多くの原因があるが、一般的にいて、これが原因だといちばんはっきり目につくものが、実は、いちばん強力に作用した原因であったというためしがない。熟考のすえ自殺をするということは(そういう仮説をたてることができないわけではないが)まずほとんどない。なにが発作的行為を触発したか、それを確かめることはほとんどできない。(83)

カミュの唱える自殺論は現代の作家の作品にも当てはまる。ジェイ・アッシャー(Jay Asher)の『13の理由』(13 Reasons why)という青少年向けの小説が話題を呼んだ。主人公のハンナ(Hannah)が自殺する決断に最も影響を与えた13人に残されたテープの録音を読者は読みながら、ハンナの心情を知っていくという設定である。「影響を与えた」といってもそれは意図的なものではなく間接的でむしろ知らない間に他人の人生を変えてしまっている。自殺する理由は、これといった明確なひとつのことでなく、そのすべての積み重ねが理由となっていく。まさに「一つずつでは大きな要因にはならないかもしれない」というカミュの言葉を実証するかのような小説である。

目取真の「希望」はカミュのこうした思考に通じるものではないだろうか。たとえ絶望にすっかり取りつかれても希望を抱いているかのように振舞わなければならない。さもなければ自殺しなければならなくなる。苦悩には何の存在価値も権利もないのだ。

目取真の主人公はなぜ焼身自殺を選んだのか、いや、目取真は主人公に何故焼身自殺をさせたのか。その問いからデリーロの*Cosmopolis* (2003) (『コズモポリス』2012)に行きついた。次に両作家が選択した「焼身自殺」そのものの意味を高橋和巳の「焼身自殺論」から考察する。

### 3. 「焼身自殺」の意味

いまや挙世滔々(とうとう)として／肉体を殺戮し／靈魂を救済する新発明に熱中している／しかも人道博愛の善意に燃えつつ……(バイロン)

グレアム・グリーン『おとなしいアメリカ人』のプロローグより

2019年4月12日ホワイトハウス前で電動車いすの男性が焼身行為を行ったことがニュースになった。実行場所から想定しうる理由は、大統領への抗議だと考えられる。このように現代社会における焼身行為は抗議手段の一つとされることが多い。

『コズモポリス』に登場する焼身自殺の場面は、実際に起こった出来事と関連付けて言及される。それは、1963年6月11日ベトナムの僧侶ティック・クアン・ドックが当時の南ベトナムのゴ・ディン・ジエム政権の弾圧と専政に抗議して、サイゴン（現・ホーチミン）のアメリカ大使館前で自らガソリンをかぶって焼身自殺したというものだ。その専政の責任者の側の一人であるゴ・ジンヌー夫人が「坊さんのバーベキュー・ショーには手をたたいてやりたくありませんわ」と放言した（高橋和巳「焼身自殺論」1963.9.）。言葉にするか行動で示すかの別はあっても目取真の「希望」の最後の場面、特に中学生たちが焼身自殺したであろう主人公＝殺人犯の「燃えかすである黒い塊」を蹴る場面は、ゴ・ジンヌー夫人の発した言葉にも類似する行為である。どれ程の思いを込めていようと社会（或いはシステム）は変えられないということである。ここでの夫人の言葉を受けて高橋和巳は、「ドストエフスキーもついに想到しえなかった自殺の形態とその意味について」「焼身自殺論」の中で次のように述べている。

つねに勝ちつねに自己を正当とみとめることを至上命令とする権力の論理の対極に、ただみずからの死を唯一の究極的武器とし、相手の面前で自害してみせる、非暴力なるゆえに自己の人間性を剥奪する悲惨な矛盾というものが位置する。（高橋 1963）

「火焰に包まれながら心頭を滅却し、滅却しつくそうとしてなお残ったであろう恨みの一端」が、強大な重力をもっていっさいのものを吸いこみつくして、すべてが無に回帰する。「仏教は元来、極端な苦行をきらう教義である。不殺生の道徳はまたみずからの肉体にも適用される。（中略）だから焼身自殺はその教義に照らしてもかならずしも推賞すべきものではない。しかし日頃、在家の仏教徒たちの喜捨によって生活し修行することのできた僧侶たちが、在家の人々の村が破壊され在家の都市の生活者の世俗的昇進の道が絶たれ、じりじりと、あるいは急速に非人間化されることを悲しんでの行為であるならば、釈迦もまたそれを許すであろう」と高橋は願っている。

更に高橋は三島由紀夫と大学紛争をめぐる対談を行っている（『潮』1969年11月号）。それは三島が自殺する1年前に行われたもので、三島と高橋というある意味で両極に立つ者たちが本音で語った「歴史的」な対談とされている。暴力的正論を展開する「テロリスト」三島に勝つすべは誰も持ち合わせてはいなかった。三島自身も自分の暴力論が日本社会に通用するはずのないことはわかりきっていたようだ。三島の自殺の決意はこのとき、かなり固まっていたのだらうと想定される。

三島 正義運動という言葉はあたっていると思いますよ。正義は表現しなけ

れば正義でないから表現する。それには二つの方法がありますね。一つはマス・コミュニケーションのたいへんな発達の中における表現、一つはこれだけしかないという最後の表現。ことばというものは、これだけしかないというところに属すると思うから、テレビや座談会で喋っていることはことばじゃない。高橋さんやぼくが書斎の中で一晩考えたことばが本当のことばであって、これが表現行為だと信じてるよ。だけど、もう一つ偽の表現行為を昭和三十年以降、世界中が作っちゃった。テレビとマス・コミュニケーションがね。

学生の正義運動の表現を選ぶときに、どちらを選ぶか。これは人間としての根本的な選択だと思うよ。つまり、これしかないという表現を体で持って選ぶとすればことばだね。最終的に、ことばか身を投げることしかない。それはもっと突き詰めれば焼身自殺だよ。このあいだ、アメリカの国会議事堂で自殺した少年と同じだ。これはことばにかけると同じ重さを、体にかけた行為だと思う。これが表現なんで、それ以外の表現は嘘なんだ。

『日本の悪霊』(463; 下線付加)

ここで三島は「これしかないという表現を体現すれば…焼身自殺」だと述べている。そしてこの選択こそが目取真が主人公に焼身自殺を選択させた究極の理由ではないだろうか。そこには高橋が述べるように「恨みのような念」が残る。そしてその恨みの念を残すことが焼身自殺した者の「希望」であるとも言える。しかし、その希望も最後のシーンで若者たちによってむなしく一蹴りにされてしまう。

#### 4. 『コズモポリス』における焼身自殺の意味

次にデリーロが『コズモポリス』で言及する焼身自殺の意味について考察したい。デリーロは多くの読者を持ちまた多くの研究者を持つ作家である。筆者はデリーロの積極的な読者ではなく今回のテーマである焼身自殺の文学表象を考察する上で、この作品に行きついた。従って本稿では作家デリーロや彼の他の作品には言及しない。

その上で、デリーロにとって言語が主要な関心事であることを再確認しておきたい。

It seems to me that I follow language as it makes its connections. Language does create a reality that I had not at all planned on. There's a sense in which I follow language in the way a poet does, openly, and without immediate concern about precise content, precise meaning. I have a curious audiovisual sense of language. I now hear a rhythm in my head, the beat and cadence of sentences, but I also see the letters as they take shape on the page. (147; 下線付加)

言葉が現実を作る。自分は正確な内容や意味に直接興味がなくても、詩人のように言葉に反応する。三島が言う究極の表現方法としての「ことば」(あるいは「焼身自殺」)

を考える時、『コズモポリス』では言葉がどのような思いもよらない現実を創り上げているのだろうか。

『コズモポリス』は、28歳で相場アナリストとして資産運用会社を経営し成功した超金持ちのエリック・パッカー（Eric Parker）の2000年4月ニューヨークでのある一日を描いている。妻は詩人であり、名家の資産家の娘である。この作品は、実際には2001年の9・11同時多発テロ後に書かれた最初の作品ということになる。従ってこの作品は、テロがらみの何らかの影響という視点で語られてきた。エリックを第三のツインタワーと読み、グローバル経済の巨大な覇権と見たてることができる。そしてエリックの精神の崩壊と世界貿易センタービルの崩壊を連動させた読み方もできる。一読しただけでは暴力とセックスの場面が繰り返し描写され、動きがない小説のように感じられる。しかし、動きがないからこそ、デリーロのいう言葉に注視できるのかもしれない。

Nothing existed around him. There was only the noise in his head, the mind in time.

When he died he would not end. The world would end. (6)

彼のまわりには何も存在していなかった。（中略）時間の流れに漂うのは精神だけ。

彼が死んでも、彼は終わらないだろう。世界が終わるのだ。（12-13）

エリックには複数の専門担当者がいる。セキュリティ主任、テクノロジー主任、ファイナンス主任、そして理論担当主任のヴィジャ・キンスキーである。ここで「焼身自殺」について議論する相手が理論担当主任のキンスキーであることに注目したい。その場面に至る言葉を追ってみたい。

He felt these things. He felt the pain.... He was here in his body, the structure he wanted to dismiss in theory.... (48)

彼はいろいろなことを感じていた。痛みを感じた。（中略）彼は生身の体でここにいた一理論上は捨て去りたいと思っている構造体で。（中略）彼は体を余分なもの、交換可能なものとして考えたかった。（76）

ここで、エリックがフォーカスしているのは精神であって肉体ではない。そして彼は「ある場面」に遭遇する。「焼身自殺」の場面である。

Something else was happening. There was a shift, a break in space. Again he wasn't sure what he was seeing only thirty yards away but unreliable, delusional, where a man sat on the sidewalk with legs crossed, trembling in a length of braided flame.



He was close enough to see that the man wore glasses. There was a man on fire.... (97)

When the wind blew, gusting suddenly, the flames dipped and flattened but the man remained rigid, his face unobscured, and they saw his glasses melt into his eyes.

The sound of moaning began to spread.... and his head was burning independent of the body. There was a break in the flames.

His shirt was assumed, it was received spiritually into the air in the form of shreds of smoky matter....

There were no chanting monks in ochre robes or nuns in dappled gray. It seemed he'd done this on his own....

Eric wanted to imagine the man's pain, his choice, the abtsmall will he'd had to summon. He tried to imagine him in bed. This morning staring sideways at a wall, thinking his way toward the moment. Did he have to go to a store and buy a box of matches? He imagined a phone call to someone far away, a mother or love. (98-99; 下線付加)

また別のことが起きていた。ある変化、空間における断裂が生じていた。ここでも彼は自分が見ているものが何かわからなかった。30メートルしか離れていないが、ぼんやりとしていて、まるで幻のようだ。そこでは男が一人脚を組んで歩道に座り、網のように交錯する炎の中で震えている。

眼鏡をかけていた。それがわかるくらい近くにいたのだ。男は炎に包まれている。(中略)

風が吹いた。突如として突風が吹き、炎は弱まって、ほとんど消えかかった。しかし男はじっと動かず、顔がさらけ出された。彼の眼鏡は溶けて目にくっつけていた。

呻き声が広がり始めていた。(中略) 頭は体と別個に燃えている。炎には断裂があった。

男のシャツがふわりと持ち上がった。煙状の物体の細片となって、空中に霊的に浮かび上がった。(中略)

そこには黄土色の相違をまとしてお経を唱えている僧はいない。グレーのまだらの服を着た尼僧もない。男はこれを全く一人でやったようだった。(中略)

エリックはこの男の苦痛を想像したかった。彼の選択、彼が呼び覚まされなければならない底なしの意思を。エリックは寝床にいる男を想像しようとした。この日の朝、横向きに壁をじっと見つめている男、この瞬間に至るまでのことを考えている男。男は店に行き、マッチを買わなければならなかったのだろうか？エリックは、男が誰か遠くの人には電話をかけたのではないかと想像した。母親か恋人に。(147-149)

この場面でのエリックは焼身自殺した男に感情移入していることが読み取れる。

Even with the beatings and gassings, the jolt of explosives, even in the assault on the investment bank, he thought there was something theatrical about the protest, ingratiating, ... He thought Kinski was right when she said this was a market fantasy. There was a shadow of transaction between the demonstrators and the state. The protest was a form of systemic hygiene, purging and lubrication.... to the market culture's innovative brilliance, its ability to shape itself to its own flexible ends, absorbing everything around it. (99)

殴打や催涙ガスの噴射、爆発の震動、そして投資銀行への攻撃に及んでさえ、彼はこの抗議行動にどこか芝居がかったところがあると思っていた。どこか媚びるようなところ。(中略)彼はキンスキーが正しいと思った。彼女が言ったとおり、これは市場が生み出した幻想だ。ここには暴徒と国家との取引の影があった。抗議行動はシステムの衛生を保つためのものなのだ。(中略)市場文化が持つ革新的な才能を立証していた。市場がそのフレキシブルな目的に応じて自己を変えられるという能力、そして周囲のものをすべて吸収できる能力の証明。(150)

しかし、再び炎に包まれた男を見ると、彼は次のように確信する。

Now look. A man in flames.... What did this change? Everything, he thought. Kinski had been wrong. The market was not total. It could not claim this man or assimilate his act. Not such starkness and horror. This was a thing outside its reach. (99-100; 下線付加)

この場面ではこれですべてが変わり、「キンスキーは間違っていた」ことを確信する。「市場はこの男を包含できなかったし、その行動を吸収できなかった。このような堅固さや恐怖は吸収できないのだ。それは市場の手の届かないところにある」と。おそらくエリックはここで初めて理論担当の理論を否定することになる。焼身自殺者の堅固さは市場のシステムではどうにもできないということだ。

Does he have to be a Buddhist to be taken seriously? He did a serious thing. He took his life. Isn't this what you have to do to show them that you're serious?...[Kinski] would not look at him. (100; 下線付加)

キンスキーはこの場面最後まで打ちひしがれエリックの顔を見ようとししないのだ。理論担当主任の敗北の瞬間である。そして、この場面でおそらく彼は自分の死を覚悟

したのだと読者は感じる。焼身自殺によってのみ、エリックの精神は崩れゆくツインタワーとなるのである。

## 5. 結論

本稿では、焼身という自殺の手段に注目し、断片的で部分的でありながらも敢えて「焼身自殺」を受容した作品を、高橋和巳の「焼身自殺論」を基調とし、作品に込められた「焼身自殺」の意図と効果を読み取ろうと試みた。

目取真俊とドン・デリーロの作品を扱ったが、彼らは相互に自死論を「交わし」てはいない。つまり、目取真のエンディングにデリーロはどう答えたかを証明することはできない。デリーロが目取真の「希望」に影響を受けたかどうかの立証ができなかったため、比較文学的分析にはなりえなかった。ただ、様々な自殺の方法がある中で、焼身自殺を描いたというただ一点の共通点から出発した。『コズモポリス』を読むまでは、目取真が主人公に何故焼身自殺をさせたのか、というところをあまり考えていなかったが、『コズモポリス』の焼身自殺のシーンを読み、ベトナム僧と「焼身供養」というところから「希望」を再読するヒントを得た。そうして読み進めていくと『コズモポリス』には経済的な背景以外の日本を発見することができる。禅僧の瞑想に始まり、そこから仏教徒の焼身供養にも似た効果を見出すことができた。

元来、捨身行である焼身供養は大乘の仏教理念に基づき肉身の一部ないしすべてを焼やし、仏に供養する行の極致である。肉身に貪着せず大誓願を遂げたい（前者）、または浄土世界（死後の世界）にあこがれる（後者）という理由から続けられてきた。本稿では宗教的意味合いで焼身自殺がどう受け止められてきたかを歴史的に精査し言及することはしなかったが<sup>3</sup>、目取真の焼身自殺には前者の目的が、デリーロからは両方の目的が読み取れた。特に主人公エリックは、焼身自殺はシステムに取り込まれない唯一の手段としての効果を語っている。

本稿では十分に手を伸ばすことができなかったが、バイロンの目取真とデリーロへの影響も調べていきたいと考えている。それは明治期から昭和期に流行した「バイロン熱」に影響を受けたであろう高橋と三島、さらにそこから何らかの影響を受けたであろう目取真。他方、バイロン熱がどのような経路をたどりデリーロに行きついたか、或いは行きつかなかったのかを検証してみたい。そうすることによってバイロン熱への感染経路は異なるが、間接的な相互の影響を見出す比較文学的分析に行きつくことができるのではと考えている。その点は今後の課題としたい。

\* 本稿は日本アメリカ文学会第36回中部支部大会（2019年4月）での口頭発表を基に大幅に修正を施したものである。

<sup>3</sup> 仏教伝来以前に雨乞いの為に焼身し身を天に捧げるなどの事例はあった。インドにおけるサティなども同類のものかと考えられる。

参考文献

- 『朝日新聞』1984年6月23日。  
『沖縄タイムス』2016年12月1日。  
大野隆之. 『沖縄文学論』編集工房東洋企画、2016。  
オスターリング, ヘンク. 『理性の危機?文化の観点 (Crisis van de rede? Perspectieven op cultuur)』Van Gorcum 出版, 1992. 《<http://www.trankiel.com/m-oosterling-j.html>》2019/12/30 閲覧  
カミュ, アルベール. 『カミュ全集 2』「シーシュポスの神話」清水徹訳、新潮社、1972. pp.77-207.  
グリーン, グレアム. 『おとなしいアメリカ人』田中西二郎訳、早川書房、1979。  
高橋和巳. 「焼身自殺論」『日本読書新聞』1963.9。  
———. 『孤立無援お思想』同時代ライブラリー 75、岩波書店、1991。  
———. 『日本の悪霊』河出書房新社、2017。  
デリーロ, ドン 『コズモポリス』上岡伸雄訳、新潮文庫、2004。  
バイロン, ジョージ・ゴードン. 『マンフレッド』岩波書店、1960。  
三島由紀夫. 『若きサムライのために』日本教文社、1981。  
目取真俊. 『沖縄／草の声・根の意志』世織書房、2001。  
Asher, Jay. *Thirteen Reasons Why*. NY: Penguin, 2009.  
Basiri, Nasim. *Suicide in Literature: A Study of Suicidal Authors' Works and life*. Germany: AP Lambert Academic Publishing, 2015.  
Bhowmik, Davinder L. and Rabson, Steve ed. *Islands of Protest Japanese Literature from Okinawa*. ed. Davinder L. Bhowmik and Steve Rabson U of Hawaii, Honolulu, 2016.  
Dellillo, Don. *Cosmopolis*. London: Picador, 2003.  
Lester, David. "Suicide in Literature," *Suicide and the Creative Arts*. ed. S. Stack and D. Lester. Nova Science Publishers, 2009.  
Medoruma, Shun. *Hope*. Translated by Steve Rabson. *Islands of Protest*. Honolulu: UH Press, 2016.  
Mukherjee, Bharati. *Jasmine*. Fawcett, 1989.  
Nakamura, Ryugo. *The Island's Will*. 2008.  
*Washington Post*. 02/04/1945.

(2019年12月30日 受理)